

## 霧多布湿原におけるアカアシシギ *Tringa totanus* の繁殖調査

藤井 薫<sup>1\*</sup>・樋口 綾<sup>2</sup>・中塚智子<sup>2</sup>・澤 祐介<sup>3</sup>・北沢宗大<sup>4</sup>・貞國利夫<sup>5</sup>・古巻翔平<sup>6</sup>・内田愛実<sup>7</sup>・佐々木紀嘉<sup>1,8</sup>

### Breeding survey of Common Redshank *Tringa totanus* in Kiritappu Marshland

Kaoru FUJII<sup>1\*</sup>, Ryo HIGUCHI<sup>2</sup>, Tomoko NAKATSUKA<sup>2</sup>, Yusuke SAWA<sup>3</sup>, Munehiro KITAZAWA<sup>4</sup>, Toshio SADAKUNI<sup>5</sup>, Shohei FURUMAKI<sup>6</sup>, Megumi UCHIDA<sup>7</sup>, Noriyoshi SASAKI<sup>1,8</sup>

#### 摘要

アカアシシギは、日本国内では北海道東部地域でのみ繁殖が確認されているが、その個体数や渡り経路など不明な点が多い。本研究では、道東におけるアカアシシギの繁殖状況を明らかにする一端として、北海道浜中町に位置する霧多布湿原において、2025年6月22日から8月14日までの間に、合計7回の調査を実施した。その結果、抱卵期と考えられる6月22日から7月6日にかけて16~32羽が記録された。7月8日には孵化後間もないヒナも観察され、確実に繁殖していることが確認された。7月26日には、調査期間中の最大値となる幼鳥10羽を含む49羽が確認された。調査地近辺では推定20-30番が繁殖していると考えられた。今回調査した範囲は、霧多布湿原の一部のみであるため、今後のさらなる調査により、霧多布湿原全体の繁殖状況の解明が必要である。

#### Summary

In Japan, Common Redshank breeds only in eastern Hokkaido; however, many aspects of its population status and migratory routes remain unclear. To reveal the breeding status of this species in eastern Hokkaido, we conducted seven surveys in the Kiritappu Marsh, Hamanaka Town, Hokkaido, between 22 June and 14 August 2025. During the presumed incubation period (22 June-6 July), 16-32 individuals were recorded on each survey. On 8 July, a chick that appeared to have hatched only a few days earlier was observed, providing direct evidence of breeding. On 26 July, the maximum count during the study period was recorded: 49 individuals, including 10 juveniles. We estimated that approximately 20-30 pairs were breeding in and around the study area. Because our surveys covered only part of the Kiritappu Marsh, further research is needed to assess the breeding status across the entire marsh.

#### はじめに

アカアシシギ *Tringa totanus* は、アイスランド、イギリス、ヨーロッパから沿海州、サハリン、北海道にかけての温帯域、亜寒帯域で繁殖し、冬季は温帯域から熱帯域で越冬する渡り鳥である (日本鳥学会2024)。アカアシシギは世界的には広く分布し比較的安定した状況であるが、英国鳥類保護協会の調査では、1995年から2023年までに繁殖数がイギリス国内で45%も減少しているとのデータ (Heywood et al.2025) もあるため、局所的な個体群の減少には注意が必要である。

日本国内では、最初にアカアシシギの繁殖が確認されたのは別海町野付半島で、1972年時点では50-100番が繁殖していると推定された (森岡・高野1972)。その後、風蓮湖、春国岱、温根沼、霧多布、知床五湖などでも繁殖が記録 (中村ら1995) されているが、体系だった調査は実施されておらず、国内における繁殖規模や現在の繁殖状況は不明である。近年は、2024年6月に実施された野付半島のアカアシシギの繁殖調査 (藤井ら2024) で3番と大きく減少してお

り、絶滅危惧種Ⅱ類 (環境省2020) にも指定されている。また、千島列島における繁殖状況は不明だが、確実な繁殖記録が得られているなかでは、北海道東部地域は本種の分布域の最東端の繁殖地と考えられ、最寄りの繁殖地であるサハリンからも地理的に離れており、北海道の他の地域でも繁殖は確認されていないことから、独自性が高い集団である可能性もある。

しかし、北海道東部地域における個体数の推移、繁殖生態、渡り経路など不明な点が多く、繁殖数が減少している要因も明らかになっていないため、まずは同地域の現状の分布や個体数を調べる必要があった。北海道浜中町霧多布湿原では、7-11番のアカアシシギが繁殖している (青木ら2011) と推定されているが、地元ガイドを中心に霧多布湿原で春季から夏季に数十羽を超える数のアカアシシギの観察記録が数年前より報告されていた。そこで現在の霧多布湿原での生息状況を明らかにできれば、今後のアカアシシギの保護に大きく寄与できると考え、繁殖調査を実施したので報告する。

\* <sup>1</sup>NPO法人野付エコネットワーク <sup>2</sup>NPO法人霧多布湿原ナショナルトラスト <sup>3</sup>公益財団法人山階鳥類研究所 <sup>4</sup>国立研究開発法人国立環境研究所  
<sup>5</sup>釧路市立博物館 <sup>6</sup>厚岸水鳥観察館 <sup>7</sup>カヌーガイドwithEAST <sup>8</sup>カヌーガイド遊房

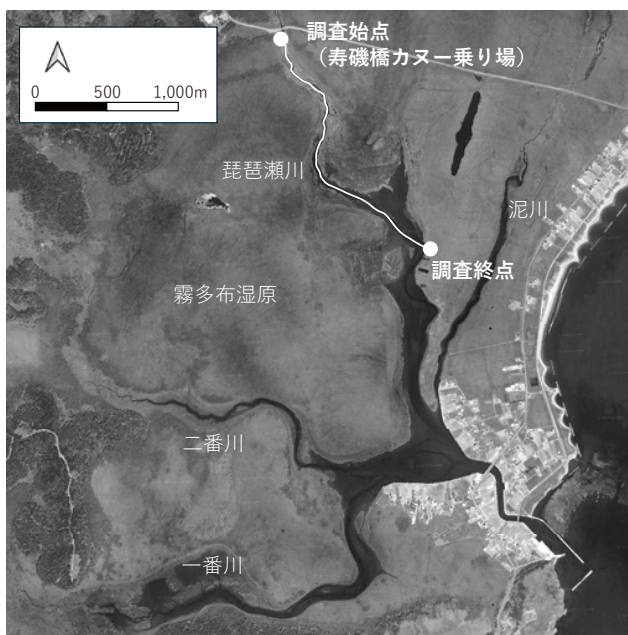


図1. 調査地周辺の航空写真と調査ルート

**調査地・方法**

調査は北海道浜中町に位置する霧多布湿原(北緯43.084839, 東経145.079293)で実施した。湿原内には5本の川(一番川、二番川、琵琶瀬川、泥川、新川)が流れ、琵琶瀬湾に注いでいる。調査地は、琵琶瀬川の寿磯橋カヌー乗り場を調査始点とする約2kmが調査ルート(図1)である。

調査方法は、約2kmの調査ルート上の視認可能な範囲(8倍~18倍の双眼鏡を使用)である片側約200m、両側約400mをセンサスし、出現したアカアシシギの個体数、繁殖状況、観察地点などを成鳥、幼鳥にわけて記録した。また、調査終点から調査始点に戻る際にも観察地点が離れているなど、重複しないと判断した個体は記録した。その他、片側200mの調査範囲外でも確認できた場合は記録した。霧多布湿原は、霧多布湿原泥炭形成植物群落として国の天

然記念物に指定され上陸できないことから、今回の調査は全行程でカヌーを使用した。調査は2025年6月22日から8月14日の間に合計7回実施した(表1)。

繁殖状況の判定基準として、全国鳥類繁殖分布調査調査マニュアルの繁殖状況の判断基準を用いた(全国鳥類繁殖分布調査事務局2015)。

**調査結果**

7回の調査でのべ195羽のアカアシシギが記録された(表1)。調査ごとの観察数の推移をみると、6月22日の1回目の調査で23羽が観察され、7月5日に16羽、7月8日の調査で9羽と観察数が減少したが、7月26日には今回の調査の最大値となる幼鳥10羽を含む49羽が記録された(表1)。ヒナ、幼鳥については、巣立ち後まもない個体でまだ飛翔力がないヒナが、7月8日に1羽、ほぼ成鳥と同大だが足の色や体色、羽毛に幼羽の特徴が残る個体(幼鳥)が、7月18日に4羽、7月26日に10羽、8月14日に7羽、それぞれ観察された。

繁殖状況については、繁殖ランクA(繁殖を確認した)として、観察コード21(巣からほとんど移動していないと思われる巣立ちヒナを見た)に該当するヒナが、7月8日に1羽確認された(表1、図2)。琵琶瀬川沿いの干潟で複数のアカアシシギに混じって、成鳥と一緒に採餌行動をしていたが、確認後すぐに草陰に身を隠した。繁殖ランクB(繁殖の確認はできなかったが、繁殖の可能性はある)については、観察コード33(威嚇行動、警戒行動により、付近に巣又はヒナの存在が考えられる)に該当する行動をした成鳥が、6月22日に3羽、7月6日に11羽、7月18日に1羽、それぞれ観察された(表1)。また、観察コード30(その種が営巣し得る環境で繁殖期に、その種のさえずりを聞いた。ただし、その鳥が冬鳥、旅鳥かもしれない時は除く)に該当する個体が、7月5日に3羽観察された(表1)。アカアシシギが確認された地点は、調査起点

表1. 調査結果一覧

調査日	時間	観察個体数		繁殖行動等の有無
		成鳥 (ヒナ/幼鳥数)		(繁殖ランク/観察コード: 個体数)
2025.06.22	09:30-12:00	23(0/0)		B/33: 3個体
2025.07.05	08:45-11:30	16(0/0)		B/30: 3個体
2025.07.06	09:05-11:45	32(0/0)		B/33: 11個体
*2025.07.08	05:30-07:30	9(1/0)		A/21: 1個体
2025.07.18	09:45-11:30	37(0/4)		B/33: 1個体
2025.07.26	09:00-11:00	49(0/10)		-
2025.08.14	04:30-6:00	29(0/7)		-

\* 調査コースの一部のみ調査実施

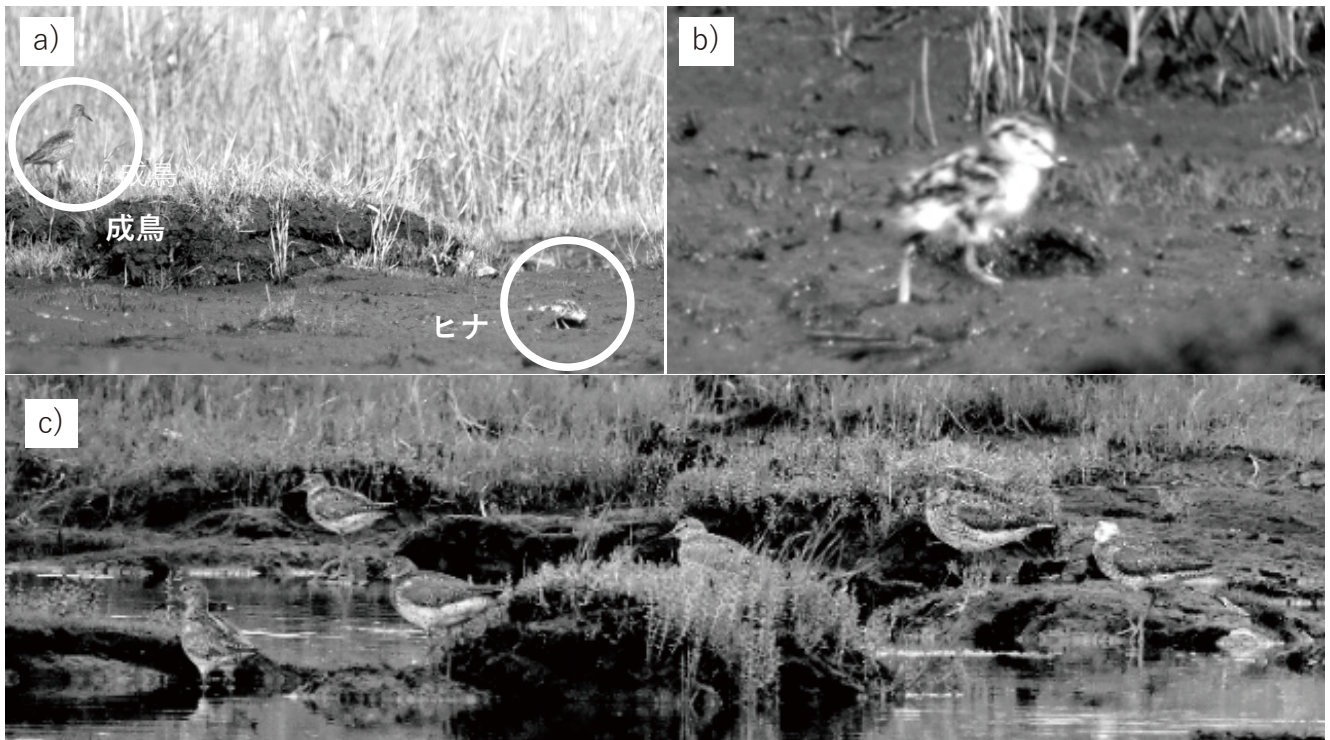


図2. a) 成鳥と一緒にいるヒナ (撮影：内田愛実、2025年7月8日)、b) ヒナの拡大図、c) アカアシシギの群れ (撮影：古巻翔平、2025年7月18日)

の寿磯橋から琵琶瀬川を下流に600mほど下った湿原の両側から記録され始め、約1,600m地点までの右岸に比較的多く記録された(図3)。川幅が広がる約1,600m以降から調査終点となる休憩地点までは記録されなかった。

### 考察

7回のセンサス調査の結果から、霧多布湿原の琵琶瀬川流域では、6月下旬から8月中旬までの間を通してアカアシシギの生息が確認され、7月26日は成鳥、幼鳥共に最大数となる、39羽、10羽がそれぞれ確認された。7月8日には、繁殖ランクAに該当する飛行能力のないヒナが確認された。この個体は、孵化後まもないヒナであり、アカアシ

シギ成鳥と一緒に行動していること、アカアシシギのヒナの形態的な特徴である上面がクリーム色、もしくは灰色がかったバフ色で黒褐色の線をもち、胸はバフ色を帯び、下面は白色 (Van Gils et al. 2020) と一致することから、アカアシシギのヒナであると判断され、今回の調査における確実な繁殖記録となる。7月6日にはヒナの確認がなく、7月8日に孵化後間もないヒナが確認されたことから、7月上旬が孵化期にあたると思われる。アカアシシギの抱卵期間は通常22-29日程度、育雛期間は23-35日程度であることから (Van Gils et al. 2020)、霧多布湿原では、6月上旬から中旬にかけて抱卵期に入り、7月上旬に孵化、8月上旬まで育雛期にあたると思われる。7月18日に確認された幼鳥4羽についても、霧多布湿原での育雛期にあたることから、調査地近辺で繁殖した個体のヒナである可能性がある。

抱卵期と考えられる6月22日から7月6日にかけて16~32羽が記録された。ペアのうち1羽が抱卵しており、繁殖に参加していない個体の存在などを考慮すると、調査地近辺では少なくとも推定20-30番が繁殖していると考えられる。これは現在知られているアカアシシギの営巣数としては、国内最大規模である。2011年に同地で実施された調査では、今回調査を実施した琵琶瀬川流域に加え、一番川、二番川、泥川、新川も含め、霧多布湿原全域でアカアシシギの営巣数は、7-11番と推定されている (青木ら2011)。この調査は7月7日および8日の2日間のみ、河川沿いをカヌーで調査したものであるため、個体数が過小評価され

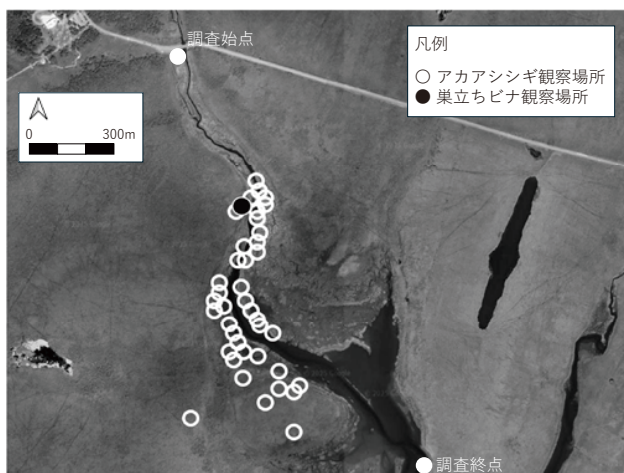


図3. 調査期間を通じたアカアシシギの確認地点

ている可能性も考えられるが、本調査では琵琶瀬川流域のみで調査期間を通して10羽以上が記録されたため、霧多布湿原ではアカアシギの営巣数が増加傾向にある可能性も考えられる。今回の調査範囲外である、他の霧多布湿原の流域河川である一番川、二番川、泥川、新川の四河川の流域でもアカアシギの繁殖が報告(青木ら2010・2011)されていることから、霧多布湿原全体での繁殖数はさらに多くなることも考えられる。

今後の課題として、霧多布湿原のアカアシギの繁殖個体数の解明のため、今回未実施の範囲における繁殖調査が必要である。また、今回繁殖状況が明らかになった、琵琶瀬川流域のアカアシギの繁殖数の推移を知るための継続的なモニタリング調査は、霧多布湿原の環境の変化を知る意味で今後も重要になると考える。この二つの調査が実施できれば、国内最大規模である霧多布湿原のアカアシギの営巣地保護に繋がる貴重な資料となると考えている。

#### 謝辞

本調査にあたり、石毛千栄子、石毛良明、工藤吉治、三戸貞夫、宮彰男、古山隆の諸氏の協力のもと実施することができた。心より御礼申し上げます。

#### 参考文献

青木則幸・青木靖子・片岡義廣(2010) 霧多布湿原におけるアカアシギ*Tringa totanus*の生息状況および河川沿いの鳥類相 平成22年霧多布湿原学術研究助成事業 特定非営利活動法人エトピリカ基金

青木則幸・青木靖子・片岡義廣(2011) 霧多布湿原におけるアカアシギ*Tringa totanus*繁殖後期生息およびジュンサイ沼周辺の鳥類相 平成23年霧多布湿原学術研究助成事業 特定非営利活動法人エトピリカ基金

藤井薫・前沢卓・澤祐介・北沢宗大・清水孟彦・田村智恵子・徳永彩乃・河口真梨(2024) 野付半島一本松地域でのアカアシギの繁殖の可能性 NPO法人野付エコネットワーク、標津町。

Heywood, J. J. N., Massimino, D., Balmer, D. E., Kelly, L., Marion, S., Noble, D. G., Pearce-Higgins, J. W., White, D. M., Woodcock, P., Wotton, S. Gillings, S. 2025. The Breeding Bird Survey 2024. BTO Research Report 765. British Trust for Ornithology, Thetford.

環境省(2020)【鳥類】環境省レッドリスト. 環境省 森岡弘之・高野伸二(1972) 北海道で発見したアカアシギの繁殖 日鳥学誌21:50-53

中村雅彦・中村登流(1995)原色日本野鳥生態図鑑:水鳥編. 保育社. 108-109.

日本鳥学会(2024)日本鳥類目録改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.

Van Gils, J., Wiersma, P., and Kirwan, G. M. 2020. Common Redshank (*Tringatotanus*), version 1.0. in: del Hoyo, J., Elliott, A., Sargatal, J. Christie, D. A., and de Juana, W. (eds), *Birds of the World*. Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA.

全国鳥類繁殖分布調査事務局(2015)全国鳥類繁殖分布調査調査マニュアル. 全国鳥類繁殖分布調査事務局, 府中市.

## 旧 二俣簡易郵便局前の郵便差出箱(1号)を受贈

石川 孝織\*

旧 二俣簡易郵便局(釧路市音別町)前の郵便ポストの更新に伴い、68年間にわたり使われてきた丸型郵便ポスト(1957年製)について、同局を管轄していた釧路西郵便局(渡部稜局長)より寄贈のお申し出をいただきました。

この丸型郵便ポストは「郵便差出箱1号(丸型)」が正式名称で、戦後間もなくの1949(昭和24)年に登場。その懐かしさを感じるデザインからも、郵便ポストの「代表」として幅広く認識されています。いっぽうで、新型への更新も進み、現在、釧路管内では2基のみ(フィッシャーマンズワーフ郵便局・標茶駅前)が使用されています。

二俣簡易郵便局は二俣郵便局として1922(大正11)年に開局、その後簡易郵便局となり、休止を経て2025(令和7)年12月1日に廃止となっています。なお、ポストは引き続き設置されています(新型に更新)。

2025年12月18日に搬入作業と寄贈セレモニーを実施、渡部局長からは「長年親しまれてきた可愛らしい丸型ポストを子どもたちにも知ってもらいたい。また、手書きでメッ

セージを伝える手紙文化の良さにも思いを寄せていただけたら嬉しい。」などのご挨拶をいただきました。

風雪に耐えながら、人々の思いをその差出口から受け止め、全国・全世界への橋渡しをしてきた郵便ポスト。当初、再塗装を行うこともお申し出いただきましたが、あえてそのままの姿で収蔵することとしました。

2024年度の企画展「釧路の郵便150年」での成果とともに、郵便の歴史、また音別町地域の歴史を伝える資料として大切に保存していきます。

なお、ポストは博物館1階マンモスホールで展示しています(郵便物の差し出しはできません)。



受贈した丸型郵便ポストと  
渡部局長(左)、  
工藤幸栄生涯学習部長

\*釧路市立博物館